

両国祭英語劇 9月11(土)、12(日)

中1から中3有志による文化祭の目玉の一つである英語劇。附属中学校開校以来、文化祭で英語劇を上演し続けてきました。

5回目となる昨年度(H21年度)は広島原爆をテーマにした「Under the Same Sky」で、英語劇都大会優勝を果たしました。

今年度の、東京大空襲と両国高校炎上をモチーフにした、「Sing Like the WIND」は、昨年度に引き続き、英語科の先生のオリジナル脚本です。



7月中旬にまず、オーディション。配役が決まってからは英語科の先生方からの発音の指導、ダンス指導、プロによる演技指導も入り、8月下旬からほぼ毎日(休日返上で)、放課後の時間も費やし、文化祭当日へと練習を積み重ねていきました。

生徒たちは、練習の合間を縫って、「東京大空襲・戦争資料センター」の見学をしたり、本校出身で戦争を体験された方にお越しいただき当校の空襲の様子を直接伺い、戦争とは何かを各々理解して英語劇に取り組みました。

◇ 英語劇終了後のインタビュー (生徒の写真掲載に当たっては了承を得ております。)



➤ 主人公役「喜一(キイチ)」

劇の最後の最後で、喜一「役」ではなく喜一になりきって演じることができたのがよかった。

➤ 祖父役「一郎」

東京大空襲という僕の知らない戦争という重いテーマでのスタートだった。戦争体験者のお話を直接伺い、学校OBの方々の協力も得られ、みんなのお陰で英語劇ができた。





➤ **演出係のリーダー**

1, 2年のときは、役者で英語劇に参加していたが、今年は演出として昨年に引き続き、優勝に導きたいと思った。先生オリジナルの脚本なので、ゼロから作り上げるのに一番苦労した。文化祭2日目の上演終了後、役者全員が舞台上上がり、観客からカーテンコールを受けているとき、みんなが輝いている姿をみて感動した。

➤ **重責にくじけず、後輩への引継ぎもこなした照明担当**

自分は昨年からの継続。ただ、昨年と違って今年は演じる生徒の人数が150名と多く、その分、照明もそれなりの技術が必要とされ、本当に大変だった。照明は左側が2年生1人+1年生4人、右側は2年生3人+3年生2人の体制で臨んだ。舞台上の人数の多さからスポットから顔を確認するのがとても大変で、練習の段階ではうまくスポットが当てられず苦労したが、今回初参加の1年生も本当によく頑張ってくれて本番では最小限のミスで済んでホッとした。



➤ **時に厳しく、時にやさしく役者の指導をした演出係**

練習中は厳しいことをたくさん言ったのに、みんなが嫌な顔もせず、ずっと頑張っていてきてくれたのがよかった。本番でも、1日目よりも2日目のほうがずっと上手になっていて本当に感動した。

➤ **劇中のスライド投影係は**

全員が初参加の1年生。

➤ **字幕係**

日本語の表現に苦労した。



➤ **英語劇脚本・音楽・演出担当の先生**

英語劇は前任校から続いているライフワークのようなものになっています。今回の作品では、Opening Act で「かあさんの歌」という絵本を引用した部分以外、オリジナルで作りました。今年の作品はイメージがしっかりできていたので、脚本や歌詞、曲がスーッと形になりました。戦争という事実を受け継ぎ、希望を未来につなげるストーリーになったと思います。昨年の英語劇は女子が主役だったので、今年は男子にしたいと思っていました。脚本的にも男子がたくさん登場するので、今回男子の参加がたくさんありうれしく思いました。作品作りの中で、毎年、参加生徒のカラーを大切にしながら演出を変えています。今年は、個々を育てて行くことに時間を割きました。色々な話を聞いたり、見たりを大切に、個々が「何を伝えるか」を意識して演技できたんじゃないかと感じています。また、演出や脚本の解釈については、生徒たちの意見を取り入れながら、進めてきました。演出の生徒たちの努力も大きいと思います。卒業生も手伝いに来てくれ、裏方、役者が学年を超え、一つになれたことは本当に素晴らしいことだと思います。

